

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 野中 大輔

本論文は、認知言語学の観点から英語の場所格交替として知られる現象を詳細かつ緻密に分析したものである。場所格交替とは、load や spray といった動詞が、ほぼ同一の内容を表す2通りの構文（移動物目的語構文 John loaded hay onto the truck./場所目的語構文 John loaded the truck with hay.）に現れる現象のことである。場所格交替は文の記述対象としての事態の捉え方の相違を反映した現象として長年注目を集め、移動物目的語構文は位置変化の側面に、場所目的語構文は状態変化の側面に、それぞれ焦点を当てた構文であるとする説が広く受け入れられているが、先行研究の多くは作例に依拠しており、実例をもとにした分析は乏しいため、2つの構文が実際にどのように選択されているのかは未だ十分に明らかになっていないと言えない。

本論文は、事態の捉え方を重視した意味観（捉え方の意味論）を受け継ぎながらも、使用基盤モデルの観点から場所格交替の実態を解明することを目的とする。このモデルでは、母語話者は具体性の高い慣習的表現を多数身につけており、慣習化のあり方は言語によって重要な点で異なりうると想定される。本論文は、大規模均衡コーパスを用いて、従来の研究では扱われてこなかったような事例を多数収集し、場所格交替の2つの構文間で慣習化している表現の種類が異なることを実証する。また、英語の料理本のレシピの詳細な分析を通して、レジスターによって場所格交替動詞の振る舞いが異なることを明らかにし、さらに、日本語のレシピに見られる対応表現と比較することによって、この2つの言語の興味深い相違をも浮き彫りにする。本論文は、これらの分析を通して、母語話者は、多くの場合、交替動詞と一方の構文が一体となった慣習的表現を場面に応じて適切に選択していることを実証することに成功している。

本論文は、一方の構文から他方の構文への言い換えがなされたり、通常は交替しないとされる動詞が臨時的に交替したりする現象があること、したがって、場所格交替という形で捉えるべき言語知識があることも説得力をもって主張している。場所格交替として一括される汎用的な言語知識があることと、細部まで指定された慣習的表現が言語知識において重要な役割を果たすことを無理なく両立させることを可能にするのが捉え方の意味論と使用基盤モデルが有機的に結びついた言語観であり、そのような言語観に根ざした研究のあり方を見事に例示したことが本論文の最大の貢献である。

本論文は、著者自身が結語で述べているように、慣習的表現を詳細に取り上げることはできたものの、扱う場所格交替動詞の数が多いとは言えず、この現象の全体像を捉えるには至っていない。しかし、捉え方の意味論と使用基盤モデルが一体となった構文研究を実践し、場所格交替に関する新たな事実を発掘した本論文が、場所格交替（および関連して取り上げられた他の言語現象）に関する研究のあるべき方向性を明確に提示する、国際的にも類例のない優れた成果であることは間違いない。

よって、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものとの結論に達した。